

# 発刊に寄せて

国際政策学部長 久保田文次

山梨県立大学国際政策学部の研究紀要が『山梨国際研究』として発刊されることになった。紀要は発行主体たる研究機関の研究成果を広く外部に公開・発信するためのものである。本学は開学後一年にも満たず、諸事今後の整備に俟たざるを得ないことが多いが、『山梨国際研究』の発刊によって、私は本学が早くも一人前の研究機関となったような感慨をもった。本誌によって、山梨県立大学国際政策学部が名実ともなった立派な研究機関であり、学部の教員が立派な研究者であることを実証されることを、切に念願する。

近年、若い研究者の間には、研究機関への採用・昇進の際の業績審査に有利ではないとの理由から、査読制度をとらない紀要類への執筆をあまり歓迎しない風潮があるようである。たしかに、「格式」あり、権威のある学術雑誌に掲載された業績は一般的には優れたものとして認知されやすいし、認知すべきであろう。しかしながら、優れた研究はどんな雑誌に発表されても、優れたものである。幸いにも、本誌は編集委員の努力によって、査読に準ずる体制を整えていくとのことである。内容の点でも大いに安心だという保証が得られることと思っている。

本学は新設忽々の大学である。学界・教育界・一般社会における知名度は高くない。だからこそ、研究機関としての発信力を高める事が、自己の研究や学問の発展のためばかりではなく、大学・学部の存続・発展のためにも絶対に必要である。また、これからの大学は研究・教育の両面において、外部の評価にさらされることますます多くなる。そして、大学・学部の評価は、その個々の構成員の研究成果に対してばかりではなく、むしろ集合体・組織体としての研究に対してむけられることが多くなってゆくであろう。どうしても、真に優れた研究を本誌を通じて発信する必要がある所以である。

一方では「格式」ある雑誌では発表し難いような、派手ではないが地道な基礎的研究、完熟度は低い柔軟な発想・手法を自由に発表しやすいようにもしたい。野球でいえば、ホームラン等長打はもちろん大いに歓迎するが、こつこつヒットを打つ事、バントを試みることも、できるようにしたいものである。

『山梨国際研究』が、本学の優れた研究の、或は優れた研究の基礎・細部を発信する機関誌として機能を十分に発揮することを期待し、その前途を祝する次第である。